

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別投承認雜誌）第三二五号
昭和四十八年三月二十五日印刷 昭和四十八年四月一日発行



第三十九卷

第四号

1973

4



—目 次—

表紙 「誕生仏」松涛達文画

御忌の春.....	中 村 康 隆.....	(2)
釈尊の御降誕.....	佐 藤 良 智.....	(4)
グアム・サイパン戦跡巡拝行.....	菊 地 謙 雄.....	(7)
カフルイ浄土院の今昔.....	新 保 義 道.....	(11)
選撰集講話④ 選撰本願の念仏.....	峰 島 旭 雄.....	(18)
念仏・人と歴史④ 二人の空阿弥陀仏.....	伊 藤 唯 真.....	(22)
異僧真覚〈第十五回〉.....	柴 田 六五郎.....	(26)
「道」西光寺への道.....	高 橋 良 和.....	(30)
浄土宗の国宝 (3).....		(32)



さへられぬ光もあるをしなべて
へだてがほなるあさがすみかな

現代は多様化の時代といわれる。あらゆる場面で様々のものがぶつかり合つて混乱しているようにもおもえる。習慣や道德の問題にしてもそうである。古い習慣も道德も、みな必要があつて生れたものであり、その時代には必要な生活の秩序であつた。時代が変ればまた別の新しい道德や習慣が必要になつてくる。新しい時代は訪れたが、まだ新しいものがかたち造られていない。若い人びとは古い道德では何ともやり切れなくなっている。といって、かれらは新しい道德を主唱するほどに社会的につよい立場をもっていない。ここに時代の一種の混乱があるのではないだろうか。

古いか新しいという立場で、自我をおし通そうとするまえに、人間としての本来のすがたをみきわめる必要がある。うららかな春の日、万物の生氣を育てる陽の光のまえには、こざかしく立ちこめる朝霞のはかなく消えてゆく。そこに、仏と凡夫のすがたをみることができる。



御忌の春

中村康隆

(大正大学教授)

陽春四月、日本列島は忽ちの間に桜の花につつまれる。そして仏教界では全土にわたって釈尊降誕を祝う花祭りが催される。野原の花をつんで花御堂を飾る寺。甘茶を供養し、訪れる子たちに分け与える寺。白象の造り物をひくところ。稚児行列もにぎわしく祝うところ。様々な催しが広く行われる。そのため浄土の寺々でさえ四月七日の宗祖降誕会は殆んど寺の勤行だけに終って仕舞いがちである。しかし、それに代って四月も半ばになると浄土の寺々は各本山を中心として宗祖法然上人の御忌ごぎ会えが盛んに行われるようになった。

東京芝増上寺では十四日から三日間、笏念仏・引声念いんせい仏・双盤念仏などの特殊法儀が行われ、また静岡以東の

各地から選ばれた唱導師や本山の役職・山内諸寺院・唱導師の法類その他の随喜寺院・まといをかつぎ木やりで練り歩く火消し各組の頭衆・稚児・檀信徒のにぎやかな行列姿が晩秋の池上いけがみの御会式ごえしきと対照的な伝統美をくりひろげるのである。京都では知恩寺百万辺と清浄華院の両本山では二十三日から三日間、総本山知恩院だけは今も昔ながらに十九日から二十五日まで一週間御忌がつとめられる。昔ながらといっても、元来法然上人は御承知のように今から七百六十一年前の建暦二年正月二十五日正午御年八十歳で唱名念仏裡におかくれになられたのであるから、もとは一月十九日から七日間行われるのが例であったのが、新暦になって明治十年から各本山とも四月

に営まれるように変つたのである。

このように浄土の各山で数日、特に知恩院で一七日の御忌が営まれるのは、後柏原天皇大永四年（一二二四）正月十八日「自今孟春の月に逢わば京畿の門葉を集めて一七晝夜法然上人の御忌を修す」べき勅命（知恩院什宝）が下されてのことであり、以来天子にのみ用いられる「御忌」の呼び名が許されてきたのであった。それ以後知恩院では京阪の門末中一定の資格者が選ばれて唱導師を勤め、一山の役職・門末・随喜の諸寺院や檀信徒たち多数が群集して祖徳報恩のため一七日の法会を営むのが例となつたのである。一月といえは酷暑なお去りやらぬ頃で、蕪村の句にも「御忌の鐘ひびくや谷の水まで」「難波女や京を寒がる御忌詣で」とある通りだが、念仏の口開け（十六日）のすんだばかりの新春早々洛中洛外の諸名利の行事中最初の盛儀とあつて都の人たちが競つて弁当を持ち華やかに着飾つて参集したものであつて、俗に弁当始めとか衣装比べとかいわれ、「着たおれの京を見に出よ御忌もうで」（几董）、「御忌まいり都ぞにしき珠数袋」（言水）と詠まれたほどで、その年の流行を占うたよりもされたということである。

明治十年この方、本山での御忌が四月に催されるようになって、桜吹雪の中の法会となり、天地も一つになつて宗祖追憶の花の宴をくりひろげるかのようで、殊に京知恩院では地統きの丸山公園の八重桜も満開で、その昔不夜庵太祇の詠んだ「拾いあげて桜に珠数や御忌の場」の句が正しくこんにちの御忌風景を叙したかにも想えるのである。

桜吹雪の中の御忌にお詣りして私達は法然上人の偉大な教えと人となりわが心に頂戴しなければとつくづく思うことである。智慧第一の法然房と当時の人にしたたえられた上人が御遺訓の中で「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」とさとされ、また念仏の声するところこそわが遺跡ぞと遺言され、そのお言葉通り死に至るまで口唱念仏を断やされなかつたことを、私たちは御忌毎に深く心にかみしめねばなるまい。行住坐臥、一挙手一投足、悉く専修念仏の表われであるよう。そしてわが身わが心を法然上人の御遺跡たらしめること。このことこそが、明年開宗八百年を迎えての、私たち信徒の心すべきことではないだろうか。南無阿弥陀仏。

釈尊の御降誕

—ルンビニーの園をたずねて—



佐藤良智

(大正大学教授)

ルンビニーの園にあればし釈尊の灌仏会は四月である。

四月号にちなんて釈迦牟尼世尊を深く追憶することは、わたしたちの心をひきしめる、よい、よすがである。わたくしは、縁あって、今年の正月まのあたりこのルンビニーの園に跡をたずね、いつ頃の制作になるのであろうか、古い御降誕の像を拝し、また、その像の安置されている小高い岡の上の木の繁りの風になびく音をきいてきました。その小高い場所の裏側にあたるところに石柱があった。これこそ名高い印度の生んだ偉人・阿育王の建立になる、いわゆるアショーカの石柱である。

ここは世尊御降誕の地なりき、と記されている石柱で、仏徒にとっては涙の出る程ありがたいものである。釈尊御誕生二千五百三十八年（衆聖点記説）にあたる今日、この石柱の

みられることは稀有なことであって、この石柱は石柱法勅と言つて王の仏教精神による国土統治の精神を伝えたものである。大磨崖法勅と共に今日残された貴重なもので、殺生を禁じ、布施を行い、道の傍に樹を植え、井戸を掘る等色々のふれを出し、また、記事を彫した。この文字はアショーカ王文字として解説され多くの記録を残した。

王の灌頂の後二十年にしてこの地に詣でたことが記されている。阿育王の年代は異説が多いが、その即位を、紀元前二百十八年であったとの説をとれば、減後二千五百年頃この園に足を止められ、この石柱を建てられたのである。

六世紀頃支那の玄奘三蔵がこの地を訪れている頃はこの石柱があり上に馬の像があったという。また、雷鳴で柱が中程

から折れ地に倒れたとあるが雷で折れるような細いものではない。他の原因で倒れたものであろう。その後いつの頃から地に埋れてしまった。何か歴史の長いものを感じさせるものがある。一八九七年A・ヒウレルという人が発掘され御誕生の地が再び世に出ることになったのである。発掘されてから



ルンビニー〈マヤ寺院〉

百年にも及んでいない。ルンビニーの跡であるということも千年以上も知られずにすごしたわけである。この他の御遺跡も発見されてからはわずかしかったっていない。御成道の地、仏陀伽耶も地に埋れていたのである。回教の支配になる前にこの大塔は仏徒によって埋められ守られたのではないかと言

われている。今日これ等の御遺跡が巡拝できるということとは、われわれにとってどんなに幸せなことであらう。

ルンビニーの石柱は現在のは上の馬の像があったという像が失われ立派に立っている。馬の像のある石柱を阿育王自らが即位の二十年に建てた旨が記せられていることも尊い。前述のように阿育王時代の作と思われる釈尊降誕の彫像を祠るお堂がある。玄奘三蔵は東隣にソトバ（塔）があり無憂王（阿育王）が建てたものであると記している。經典（因果經）にはこの彫像のように、「夫人（マヤ夫人）は彼の園の中に一大樹あるをみる。名づけて無憂と言う。花色香鮮、枝葉分布し、極めて茂盛となす。即ち右手を挙げて之を牽摘せんと欲するに、菩薩は漸々と右脇より出ず」と、また、「時に樹下にも、亦七宝七経の蓮花生ず、菩薩蓮花上に堕ち扶持するものなくして自ら行くこと七歩、其の右手をあげて獅子吼す「我はは天天の中において最尊最勝なり。無量の生死、今において尽きんとす。此の生は一切の人天を利益せん云云」とある。これが「天上天下唯我独尊」と言われるものである。み堂にある彫像には、受けている人が彫されている。經典は後にできたものであろう。釈尊が聖化されて行ったものである。ただ右脇から生れられた像が古いこの像に彫されていることは

事実である。お顔がそがれているのは回教禍をいつか受けたものであらうと思われる。

唯、ここで一言申し添えておきたいことは、七歩あゆまれたということである。七というのは今日でも行われている数の一つの単位であるが、仏教の場合は異って解せられている。仏教では六道輪廻ということがある。輪廻の考えが仏教本来のものではないという説もあるが、現実には深く仏教の中に根づいていることは知られる通りである。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六である。われわれの心の中に本来この六道はあるのであるが、物象化されて実在するものと信じられてきた。七歩行かれたということはこの六道を越えたものというのである。それが心の中に実在するものと考えてもいいし、また、畜生や人間で知られるように実在するものと信じてもいい。何れにせよ釈尊は生れながらに七歩あゆんでこれらを超越されたという信仰があったわけである。事實は、カピラ城主の浄飯王を父とし、マヤ夫人を母として人間にお生れになり、二十九歳にて出家、三十五歳で成道されて仏陀となられたので初めから人間を越えられたものではなかった筈である。しかし、釈尊を尊敬し、崇拜することから御誕生につき色々の物語りと信仰が生じたのである。

何れにせよ、摩耶夫人がその御生家にて御出産をなされよ

うとその当時の習慣で急がれた途中花香るルンビニー園にて御降誕遊ばされたことは史実であると信ぜられる。わたくしはこの園にしばし足をとどめ釈尊を追憶することができたことを生涯のよるこびとする。ルンビニーは現在インド領でなく、ネパールになっている。政府は現在この地を聖地として更にととのえるころみをされているときいている。

わたくしの仏跡巡礼の旅は、現在日本寺が完成ま近くなっている仏陀伽耶にも及んだ。ここにはビルマ寺その他のみ寺が立派に完成している。昔、インドは御承知のように天竺とよばれ仏徒のあこがれの地であった。明治の頃から漸く稀に日本人が訪れるようになり近年に至っては数多くの人達が参拝できるようになった。日本寺が建立されようとは近來まで夢にもしなかったことである。仏陀伽耶の塔内の釈尊像を拝したとき涙がでてとどまるところがなかった。わたくしの生涯の思い出の一つとなりまた釈尊崇敬の更に深まることであろう。わたくしの夢の巡拝は更に所々に続いている。無量寿経をお説きになったという王舎城。釈尊がしばしば訪れ給うた竹林精舎。そこには今も竹林がある。ブーゲンビリアの赤い花咲く初転法輪の鹿野苑。最後になごりをおしまれふりかえり見給うた吠舍離、涅槃の地クシナガラ等々、珠玉のよ

うな御遺跡がわたくしの心の中に奥深く秘められている。

南溪の島にねむる
英霊の冥福を祈る

グアム・サイパン戦跡巡拝行

菊 地 謙 雄

(神奈川教区教区長)

私達が此の度グアム・サイパン戦跡巡拝を志したのは、今流行の海外旅行ブームに乗ったのでもなければ、横井庄一さんの奇跡の生還から脚光を浴びた土地への好奇心からでもない。終戦二十七年の星霜を経て我国は未曾有の高度経済成長を見た反面、苦しかった終戦当時を忘れがちになっていく。今日程、身命を屠して国に殉ぜられた幾多の英霊を、思い出さなければならぬ時はないと思う。英霊の献身によって私共の思想は転換され世界共生という国是が築かれ、今日の来つたのを忘れてはならない。現地を訪れ、英霊の血肉を吸い、今なお遺骨の散在する戦跡にふれて戦没者のご冥福を祈り、自己反省のよすがとしたいためであった。

グアム島へ……

二月九日午前十一時、浄土宗神奈川教区役職者、寺院婦人並びに檀信徒総代の一行十六名は快晴の羽田を出発した。パンアメリカン航空のジャンボ・ジェット機は三時間余りで寒冷の日本から灼熱のグアムへ私達を運んでくれた。折りしもスコールの過ぎ去った空港は、汚染と木枯に痛めつけられている日本の山野とは打って変った眼もまばゆい大自然の様相であった。

バスの車窓にうつる熱帯樹林、咲き競う花々、空も海も、そのものの本然の色彩を漂わせて我々を迎えてくれた。アロハやムウムウ、ドレスの度ぎつい原色も此の土地では全く自然と調和した美しい配色である。

ホテルで旅装を改めた私達は、直ちに昭和四十五年南太平洋戦没者慰霊協会が、南洋の島々で散華された五〇万英霊の

冥福と世界平和を祈念して建立した「平和記念慰霊塔」に参拝した。

この合掌型の白亜の塔は、グアム日本軍の終焉の地に建てられている。

おそらく完膚なきまでに砲火に痛めつけられて焦土と化した此の土地

が、二十七年の歳月を経て樹木が育ちジャングルと化したのである



グアム平和記念慰霊塔

私達は祖国から持ち来った種々の供物を捧げ、献花献香して恭しく誦経礼拝した。

グアムは一五二一年ポルトガルの探検家マジェランによって発見され、始めて歴史文化の上に登場したのであるが、一六六五年スペインに占有され、一八九八年西米戦争の結果アメリカ領となったのである。

今次、日米開戦と同時にサイパンを基地としていた日本軍機が爆撃を始め、十二月十日にアサンやアガットの浜辺から上陸した日本軍の占領する所となった。それ以来二年有半、日本軍の支配下にあったが、昭和十九年七月、再びアメリカ海兵隊が同じ場所から上陸して大激戦となって日本軍は玉碎したのである。

現在のグアムは、整然と舗装された街路が緑の熱帯樹林の間を走り、ハイビスカスやブーゲンビリア等熱帯の花々が四季を通じて咲き乱れ、アメリカ風の建物やスペインの遺跡、魅惑的なチャモロの風物が点々と見られる。日本からの新婚旅行者や観光客が跡をたないという真に美しい楽園となっている。

二十七年の昔、日米両軍の戦火は全島を焦土と化し二万を越す戦没者の血肉を深く吸い込んだ玉碎の島であるというこ

ヤシの喬木が程よい間隔をもつてのびていた。塔のうしろに丘陵がある。日本軍最後の地下壕が跡を残している。此の丘陵だけは戦死者の血汐に染められたように樹木はなく、雑草の間に深紅の土肌を露していた。

とを誰が信んずることができようか。

此の白亜の慰霊塔だけが、永遠に戦争の悲劇を語り伝え、人々に、悲しみと悔恨の教を残すことであらう。訪れる人の少い此の地に真赤な南洋の夕陽が温く照らしていた。

サイパン島へ……

二月十日朝六時、コンチネンタル航空でグアム空港を飛立つと三〇分程でサイパン空港に着く。現在は国連の委任統治下にあるが、第一次大戦後長く日本が委任統治した島である。日本の製糖会社やコーヒー製産会社があつて鉄道も敷設されていたという。今サイパン神社に製糖王松江春治の銅像や、当時の小さな蒸気機関車が飾られている。

特に私共が忘れないのは浄土宗の青柳貫孝師が、戦前、南洋寺を建立し、日本語学校を經營して原地の人々に念仏を弘め、日本文化を普及したことである。原地の案内人に特に請うて其の地を訪ねることが出来た。爆撃で焦土と化したその地は、密林におおわれているとはいへ、コンクリートの門柱が二本残っていた。コバルト色に塗装された表面に「浄土宗多聞山南洋寺」と刻まれた文字が、はっきりと読みとれる。

正しくその門柱の奥に南洋寺が聳え、門の前のジャングル

の内部に日本語学校があつたのだ。私達は、しばらく當時を追憶して感涙にむせんたのである。

サイパンはグアムよりも小さく人口二万余とか。ひなびた静かな島で、日本語の話せる人が多く、日本に好意をもっているようである。北辺を除いて、ほとんどが平坦で珊瑚礁に囲まれた海浜から遠く数百メートルの緑の浅瀬が続いて濃紺のマリアナ海溝の荒波を防いでいる。アメリカ松やココヤシの大樹が熱帯の花々に交って繁っている文字通り常夏の楽園である。

ハファアダイという新装のホテルに少憩して目的の戦跡参拝に出發した。

ワンさんという原地人のガイドの流暢な熱情溢るる日本語の説明を受けて私達の感激は一入であつた。

焦土と化した両側の丘陵はアメリカの飛行機によつて撒布された種が生長して数メートルの樹林をなしている。その間に生き残つた南洋桜やココヤシの太木が枝を茂らせている。北方に走ること数十分で車が左折すると日本人戦没者碑のある絶壁の海岸に出た。

数十メートルの断崖の下は南太平洋の怒濤が岩をかんで吼えている。折から猛烈なスコールが、からだを吹きとばしそうな強風に交つて頬をたたいた。

私達は其の地に建てられている観音像に香を献げ供物を供えて誦経礼拝した。わだつみの懲戒の声か英魂の慟哭の叫びが、此の大自然の咆哮に向って「魂魄鎮まりませ」とただ読経するのみであった。

ワンさんの悲壮な言葉は痛く胸を打った。「幾千の友軍が此の断崖から天皇陛下万歳と叫んでとびこんで行った。後方の山をごらんない。雨と降る米軍の艦砲射撃は山容を変え岩肌を露呈し絶壁となっています。皆さん、お国に帰えれない将兵の霊に煙草を、お菓子をお供え下さい」と。

南雲司令官以下多くの将兵が玉砕した日本軍最後の砦、バシザイクリフ等悲壮な戦争の傷痕を次々に参拝した。密林の上に覆いかぶさるように直立する岩壁の下に今なお、遺骨

お知らせ

承安五年（一一七五）春三月、法然上人が浄土宗を開かれてから、明四十九年は、ちょうど八百年の聖辰を迎えます。五十年目ごとにおこなわれる開宗記念行事であり、まさにあいがたい千載一遇の法縁といわなければなりません。開宗七百五十年は大正十四年におこなわれましたが、その後今日までの五十年間は、かつて日本の歴

は散在している、が収集する術もないとか。樹林の根が交錯し不発弾や鉄片が人間の進入を阻んでいるという。南十字星きらめく、此の一見、平和に見える南溟の島に、とこしえに怨念のしこりが内蔵されるのではなからうか。

グアムもサイパンも日本人のレジチャーによって蘇っているという。皮肉なことに日本は日本人の手によって攪乱した土地に再び資財をつぎ込んで蘇生させているのである。——が、英魂の安らぎは、世界共生実現以外には求められない。宇宙の大生命に帰結した魂は、現に生きている私達が、万邦一体の成仏国土の実現をはたさないうで祖国に在る安穩を与えることはできないであろう。

私達は多恨の情を抱きつつ此の地を去ったのである。

史が経験しなかった激動のなかのあゆみであったともいえましよう。この機会に、本誌でも、種々の企画を立てておりますが、第一弾として、五月号を浄土宗開宗八百年記念慶讃特集号として、浄土宗々務庁と共同編集のもとに、開宗八百年と念仏のすがたをお届けいたします。ご期待ください。

新築のカフルイ浄土院

—一九六九年移転



カフルイ浄土院の今昔

—ブウネネからカフルイへ六十余年の誉れたかきその歴史—

新 保 義 道

(カフルイ浄土院主幹)

カフルイ浄土院がマウイの中心地に移転したのは、一九六九年であるが、その前身ブウネ浄土院(旧称ブウネネ浄土宗教会堂、後にブウネネ明照院と改称)は、一九〇九年(明治四十二年)の草創で、満六十年後その名も改め新築したことになる。

当院の開山、原聖道師は一九〇八年(明治四十一年)十二月二十五日開教使としてホノルルに上陸、浄土宗別院勤務約一年後の一九〇九年秋、新任の室山実静師と共に、浄土宗未開教のマウイ島開教を志し、身にはモーニング・コートを着し、肩に伝道旗を持し、マウイ島の西岸ラハイナに上陸、同地青木ホテルに約一週間滞在、その間にも野外伝道、講演会を開き、次いで中央マウイのカフルイに進出、同地花岡旅館を一時的根拠として各方面に出張、野外伝道に従事した。室山師は、マウイでの布教伝道僅か十日にしてカフルイ島伝道の為クロデン号に乗ってカフルイ港を出帆した。「この一刹那、海と陸との両者間には一時的にもせよ、離別の涙潸然たるを覚ゆ

と、原師は手記に述べている。

更に原師は砂糖耕地の中心地、ブウネネ東五番を仏法有縁の地と定め同地に赴いた。ブウネネは当時よりアメリカ最大を誇る砂糖耕地で、一周すれば百マイル以上の広大な地域の所々に、労働者住宅のあるキャンブを持ち、多数の日本人移民が居住していた。

同師は耕地通弁ウイリアム・メッゲロ氏（父はスコットランド人、母は日本人）を介して同耕地の耕主フランク・ポールドウイン氏に対し、ブウネネ耕地に居住し、仏教伝道に従事することの許可を願ひ出たが、最初の間は、キリスト教徒たる同耕主は難色を示したが、再三の懇請に同師の熱意に感じ、労働者住宅の一室を貸与してくれた。尚当時の耕主は中世の領主の如く、移民労働者に対し生殺与奪の権を持つ程の権力者であり、ハワイ各地の耕主はキリスト教宣教師の子孫が多かった。日本人移民の中にはキリスト教徒たる耕主の歟心を買ひ、自己の立身を図るためキリスト教に改宗した者さえあった程であった。

原師は宿舎の貸与を受けたので、直ちに部屋の一隅に壇を設け、常に身につけていた守本尊紙製黒本尊の御影を祀り、丸型馬鈴薯を二つに切つて夫々一本の箸を立てて一對のろうそく立とし、二本のラムネびんを一對の花立、湯呑みに土を

入れて香炉として仏前を莊嚴し、入仏式を挙げ仮布教所とした。これが当院の濫觴である。

根拠の出来た原師は自動車の無い当時のこととて、徒歩にて遠近の布教に従事したが、その間の労苦は私宛の手紙に「徒歩行動の爲遠隔地への出張の帰途、砂糖黍畑又はキャベ林の真つ只中で迷子となり、野宿せしこと幾十度、或は猛烈なるスコールに襲われ全身濡れ鼠、時には足裏の底豆の為に進退に窮し、時には空腹に悩まされたこともあった」又「身にまとう衣服は色あせて黄色化したので、世人は羊かんと尚の別号を以て呼ぶに至る」

と、述べてあった。弘法の為には文字通り、不惜身命、恐らく初期ハワイ開教に従事された諸先輩はひとしくこの苦勞をなめられ、その血のにじむような御苦勞の上に、今日のハワイの仏教が安坐しているのではないかと、慙愧にたえない次第である。

このような同師の窮状を目のあたりにした人々によって百金ドル（当時の日本人移民は十時間の奴隷に等しい労働による賃銀が月十八ドルであった）の金が集められ、馬と馬具一式が寄附されたという。乗馬を得た同師は、行動も容易となり、現在の道でも十マイル乃至二十五マイル（当時の道では恐らく一倍半以上と思う）はなれた、パイア、マカワオ、



ブウネネ浄土宗教会

— 一九一〇年落成式

クラ、ラハ
イナ方面ま
でも出張布
教に出かけ
た。それに
より同郷
(九州)出身
の知人、浄
土出身の
知人の数も
増え、ここ
に、マウイ
浄土宗教会
堂建立の機
が熟して来
た。

一九一〇
年(明治四
十三年)三
月吉祥日を
トし、同志

発願主となり、松井嘉市氏を委員長とする建築委員も出来、
(趣意書省略) 建築実費二、三〇〇ドル、垣及び水道費三〇〇
ドル、荘殿費六〇〇ドル、机、椅子その他五〇〇ドル、雑費
三〇〇ドルの総計四、〇〇〇ドルの予算にて桁行四八呎、梁
行三十呎、総二階建の寺院建立運動を起し、敷地は耕主の好
意により貸与をうけ、資金不十分な中から工事に着手し、三
カ月以内に竣工したという。この建物は後に一部改造され、
一九六九年までブウネネ明照院、ブウネネ浄土院と改称され
ながらも、二階を本堂、階下をホールとして使用されて来た
ものであった。

ブウネネに寺院の建築なるや、ラハイナ、ワイルクの信徒
の熱望によって、両地に浄土宗仮布教場を設置し、前者には
斎藤源道師を迎え、後者は原師が兼務し、更にキヘイ、クラ
両日本語学校を手に入れ、キヘイには曾田賢雄師、クラには
吉水天瑞師を送って教線を拡張して、マウイに於ける浄土宗
の基礎を確立した。

一九一三年(大正二年)好き後継者大田秀山師夫妻を得た
ので、原師は五月米大陸遊学を志し、

「信徒各位の盛大な歓送を受け、カフルイ港を離れた。そ
の時信徒の一人、井手利吉氏曰く『アナタ、ココマデ苦勞
シテ、コノオ寺ヲ捨テテ行キマスカ』の一言が私の耳底に

生きています」

と。同師は米大陸遊学後帰国し、大正大学教授として宗門子弟の教育に従事された。

一九五六年私が当院に着任した時には、記録らしきものは何一つなく、一九三四年ハワイ浄土宗教団発行の「浄土の光」所載の僅か数行の記事が唯一の手がかりであった。三年後に迎えた創立五十周年を記念して五十年史を編纂する為、歴代開教使に在任当時の記録をお願いした中で、特に原師は非常に綿密な手記をお送り下さった。併し岸門主猥下をお迎えしての盛大な五十周年記念法要の記事及び完成した五十年史を見ることなく、法要に先立つ二カ月前の九月一日遷化されたのは返す返すも残念な次第である。

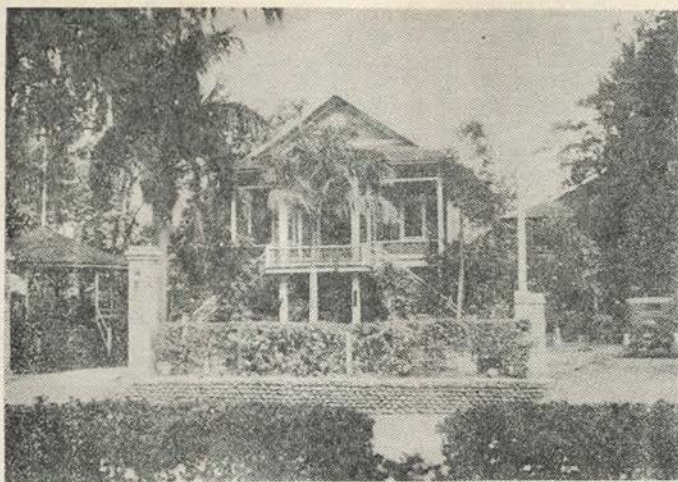
二代大田秀山師は着任の翌一九一四年（大正三年）四月、貧児、孤児、不就学児童教育機関、マウイ実科女学校設立、日曜学校を開き、一九一六年実科女学校々舎（後の庫裡）を新築、その間一九一四年五月七日ワイルク浄土宗教会堂を設立している。又一九一八年には明照仏教青年会を組織した。

第四代三上運海師は第三代西山靈定師が閉鎖した実科女学校を、一九二八年に再興し、その内容を改め、公立学校を卒業した女子の教育機関とし、一九三三年には実科女学校々舎を新築された。

それ以後は日本人一世の全盛時代を迎え、当院も発展の一端を辿ったが、一九四一年（昭和十六年）日米開戦と同時に第五代藤花教道師は在任一年三カ月にして米軍に抑留され、戦後同師は日本へ引揚げ、一九四八年第六代花田徹水氏の着任までは開教使不在の為衰え、同師又在任七年にして帰国されたのであった。

一九五六年一月、半年の開教使不在の後を受け私が着任、同年吉水講発足、日曜学校の外に成人対象の日曜礼拝を開始、翌一九五七年九月にはブウネ浄土宗日本語学校を開校、十年にはシニアの外に、ジュニア明照仏教を再発足し、創立満五十周年に当る一九五九年を迎え、十月には知恩院門跡岸信安猥下を迎えて創立五十周年慶讃法要を厳修した。この五十年目の年が奇しくも当院にとっての一大転換の第一年となったのであった。

従来、ハワイの各砂糖耕地では、交通機関の未開発の為、各国移民労働者の舎宅を耕地内の各所に建てて居住させていた。それらの集落をキャンブと呼んでいた。アメリカを誇るブウネ砂糖耕地（ハワイ商業砂糖会社）も企業の合理化を進め、耕地内各地に散在するキャンブを取りこわしそこを砂糖黍畑とし、隣町カフルイにある畑に不適な砂地を分譲してそこに耕地従業員を居住させる計画を發したのが、創立五



改装前のブウネ浄土院

一九二二年

十年目の年であった。

この為当院の信徒の大部分が半強

制的に、三

万乃至五万

ドルという

労働者にと

って過重な

金を払って

土地を購入

し、家屋を

新築せざる

を得なくな

ったのであ

る。元々当

院は、一周

百マイル近

い広大な土

地に散在せ

る約一五〇の信徒、而もその半数以上は他宗信徒による賛助会員の教団員で、その大部分が隣町へ移転せざるを得ない人々であった。これに伴い耕地キャンプの真つ只中にあった当院もまた、何処へか移転新築せざるを得ない事情に立ち至ったのである。

五十周年記念法要を終えてまだ一カ月もたたない一九五九年十一月十八日、教団臨時総会を開いてこの件につき協議したが決論を得ず、以来四年間、度々の臨時総会、役員会を開いたが決論に達することが出来なかった。それは前述の如く、極く少数の信徒で而もその大部分が移転組であるため、自分自身が果して数万ドルで家の新築が出来るかという不安が先に立ち、「寺どころか、自分の住むところがどうなるか」というのが偽らざる本心であったと察せられる。火災等による寺の新築、古くなった寺の改築の場合は信徒自身に経済的不安はないが、信徒も寺も同時というこの事態を、私は「人災」と呼んだ。

それから四年、信徒は徐々に隣町の新開地に移転し、遂に寺の周囲には一軒の家も無くなった。一方信徒側では移転後も僅少の金なら月々拠金することも出来るという確信も出来、ここに、一九六四年一月二十八日、臨時総会において移転新築を決議し、第一次計画として二カ年で土地を購入し、

その結果をみて、第二次計画を立てるということになった。被整理地区内の多数の仏キリスト両教寺院教会中、その中には信徒数に於て当院に数倍するもの多々ある中で、当院は移転新築の第一声を放ったのである。

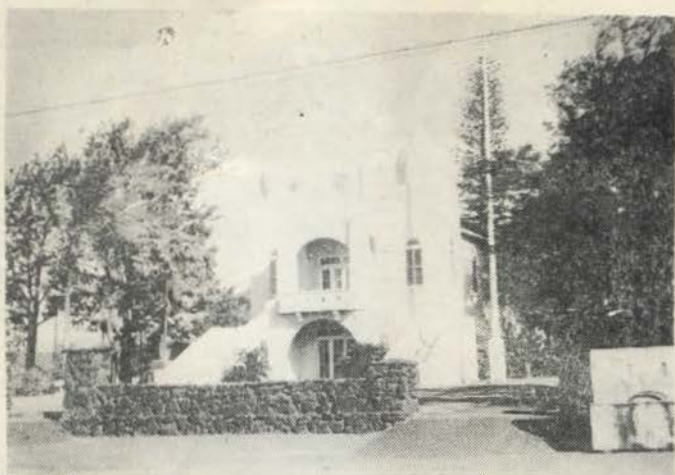
予定通り二年後の一九六五年十二月には、購入し得る最大限の現在地二六一七一平方呎の土地を購入、第二次計画として寺院建築をし、信徒一九〇人となって、年二回のバザー、及び共進会でのチャーハン売りの収益、月々の拠金、信徒以外の献金を以てしても大工事に着手し得る金は集まらない。止むなく幾つかの銀行或は予金貸付協会に貸付の交渉をするも、信徒数の少い寺院には貸出しは出来ないとの回答、ハワイ浄土宗教団本部に借金を懇願するも之又拒絶され、何時建築に着手出来るか見通しさえつかない状態に追い込まれた。その後私夫婦は知人である貸付協会の支配人にその窮状と、信徒一九〇人となって基金づくりに努力している実状を度々訴え続けて来た。一九六八年七月某日、突然同支配人が私に向い「数は少くても、そんな強力な信徒を持つ寺ならお金を貸しましょう」と言われ、私自身天にも昇るような心持がした。そのかげには次のような事実もあった。

実は、私が着任して御本尊様を拝した時、何時折れたか分らない程折れ口も黒くすすけてはいたが、御本尊様の手の指

が数本折れたままになっていたのを発見した。もの言わぬ御木像とはいえ、若し自分の指だったら放っておかない、勿体ないことだと、早速日本の仏具屋に相談したが手首から切り取って送って来なければ修理は出来ないとのこと、私としては修理の為とはいえ手首を一時的にもせよ、切り離すことは忍びない。そこで大工とか指物屋の経験ある人に尋ねても、仏さまの手を修理することは出来ないということで、止むなく気にかかりつつも放置していた。或る日某信徒に何気なくこのことを話すと「私が何とかやってみましょう」と言われて、立派に指がついて、私がやっと安心した直後に、急転直下、行きづまっていた建築費借入れの難関が突破出来たのであった。

直ちに同年八月正式に貸付の手続きをすませ、九月十五日には地鎮式、十月二十四日工事開始、翌一九六九年七月完成、八月一日、二日の二日間に亘り盛大な落成慶讃法要を営むことが出来た次第である。

九カ月にわたる工事は、極く一部の難工事の外は、有住兄弟請負会社の社長有住弘氏はじめ兄弟、従業員無料奉仕、信徒並びに友人達による毎週土曜、日曜日の労力奉仕によって、殆んど材料費近い金額で、間口六十呎（約二〇米）奥行き一二五呎（約四一米）の大建築物と開教使住宅、境内地の



改装後移転までの

ブウネネ浄土院

大部分はア
スファルト
舗装の現在
の寺が完成
したのであ
る。

寺は資金
不足から、
たとえ外観
は悪くとも
内容を立派
にとの方針
で、限られ
た土地に如
何にして必
要最大限の
ものを建て
るかという
ことに重点
を置き、信
徒は「寺は

先生が使うのだから先生のよいように考えて下さい」という
ことで、本堂・ホール・教室等欠くべからざるものの形を縮
尺で厚紙に切り抜き、幾晩もあちらに置きこちらへ置きかえ
た結果、本堂・位牌堂は旧よりやや大きく、ホールは旧の約
二倍の三百人収容のステージ付き、両方共資金面で完全妨害
は出来ないまでも半防音で拡声設備付き、ホール付属の広く
て気持のよい炊事場（外にガスバーナー七ヶを設けた炊事場を
おく）日本語学校、日曜学校用の教室二、オフィス、物置、
便所等を総て一つの建物の中に収めた全くの型破りの設計、
それだけに使い易いのが自慢となっている。

本堂は東向き、正面からは世界一の休火山ハレアカナ（約
三、〇〇〇米）―日本人一世は霊峰日宮山と呼んだ―を約十マ
イルの彼方に仰ぎ、片面は高等学校、片面は小学校及び公園
を控えた自然環境にも恵まれた土地に、弘法求法の道場が出
現した。

原師が三カ月以内に新寺建立したのに比し、十カ年の歳月
を要したことの新寺は名称も新たに「カフルイ浄土院」と改
称して完成した年は、恰もブウネネ浄土宗仮布教場草創満六
十年の記念すべき年でもあった。

選 擇 集 講 話

〈第四回〉

選 択 本 願 の 念 仏



(早稲田大学教授)

峰 島 旭 雄

一 「願」の世界

第一章「聖道浄土二門」篇、第二章「正行雜行二行」篇に続いて、第三章は「弥陀如来余行をもって往生の本願となしたまわず、ただ念仏をもって往生の本願となしたまえるの文」という章題をもち、「念仏往生」篇、「超世本願」篇等とよばれる。その内容は本願・選択・念仏の問題にかかわり、『選択集』がすなわち八選択本願念仏の集であることの概要(エッセンス)がここに凝集

しているといえる。もとより『選択集』十六章のどの一章といえども全体の有機的なエレメントであり、いづれが他にまさって重要であるとはいえないけれども、この第三章がとりわけ概要であることは、古来指摘されているところである。

われわれ人間には、食いたい・寝たい・着たい等の願望から、精神的に高尚な、真・善・美の価値を追求し獲得したいというような願いにいたるまで、じつに種々様々な願いがある。それらの中で、生と死にかかわる願こそ、われわれにとってもっとも切実、かつ最高の願いで

あるといえよう。それは純粹に宗教的な願いなのである。第三章に述べられる「本願」とはこのような宗教的世界における願いであり、そこでは、その原構造が、とりわけ仏の側からして、解き明かされている。

すべて仏道を修行する者は、その当初において、願を立て、その実現に邁進する。かかる求道者たちに共通な願（総願）として四弘誓願がある。それは、すべての人々を救いとうとうという一つの利他の願と、すべての迷いを断とう、一切の仏の教えを学ぼう、このうえなき悟りにいたろうという三つの自利の願からなる。大乘仏教の求道者、菩薩にとっては、自己自身のみの悟りが目標ではなく、同時に他のすべての人々が救われることが目標であり、自利の願は利他の願に相即する。すなわち、自己の悟りが同時条件的に他のすべての人々の救いを伴うことによってのみ完成するという「願」の原構造がそこにあるのである。

この総願にたいして、阿弥陀仏が立てられた願はこの仏にのみ特殊な願であって、別願といわれる。阿弥陀仏の願は四十八願であるが、第三章では、冒頭から『無量寿經』を引用し、四十八願建立のいわれを述べ、具体的には無三惡趣・不更惡趣・悉皆金色・無有好醜等の願に

触れている。かつて世自在王如来のとき、一人の国王がいた。かれはこの仏の説法を聞いて発心し、国も王位も捨てて仏道修行者となり、法藏と名のり、一切の人々を平等に極樂淨土に救いとうとうという願を立てて修行し、ついにこれを成就し、阿弥陀仏となられた。この法藏菩薩が因位において立てられた誓願が四十八願である。四十八願のうち、たとえば第十八願は「もしわれ仏を得たんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ。」であるが、この「もし生ぜずんば正覺を取らじ」という誓願形式のうちに、阿弥陀仏の本願なるものが自利利他相即の同時条件的な原構造をもつことが、明らかに看取される。

二 「選択」の思想

法藏菩薩が願を立てられたとき、世自在王如来は二百一十億の諸仏の国土の勝劣、そこに住する人々の善惡を、ことごとく眼前に現わして見せられた。法藏菩薩は五劫の間深く思惟し、それらの中から最惡なものを選び

捨て、精髓を選び取って、極楽浄土を建立されたのであった。『大阿弥陀經』に選択というのはこのことであり、『觀無量壽經』に攝取というのも同じことである。第三章では、この選択摂取の義が四十八願中の五願に約して検証されるが、それは結局第十八願へと帰着する。

第十八願が「本願中の王」として、四十八願の精髓中の精髓として、選択されるのである。そもそも仏教の中で仏国土への往生行としては、六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若）のいずれかを挙げたり、菩提心・六念（生天を願う法）・持経・持呪（真言や陀羅尼を唱えること）・造像起塔・飯食沙門・孝養父母等を挙げる場合があるが、これらすべてを選び捨て、「乃至十念」を説く第十八願が選り取られるのである。すなわち、もっぱら阿弥陀仏の名号を唱える念仏行を説くものとしての第十八願が四十八願の眼目とされるのである。

では、なぜ念仏行が選り取られるのであろうか。「聖意測りがたし、たやすく解することあたわず。」であるが、あえていえばその理由として勝劣の義と難易の義が挙げられる。まず勝劣の義とは、いうまでもなく、念仏が優れ余行が劣るということである。なぜなら名号は「万徳の帰するところ」だからである。南無阿弥陀仏と

いう名号のうちには、一切の内証・外用の功德がそなわっているのである。この念仏功德ということは、すでに述べたような法蔵菩薩の因位における誓願と修行、そしてその成就があるからこそなのである。曇鸞大師の『往生論註』にいわれる「願もって力を成じ、力をもって願を就す」というような願力が名号のうちにこもっているのである。次に難易の義とは、すでに第一章でおなじく『往生論註』を引用して、五濁の世・無仏の時には自力で陸路を行くような難行道ではなく、海路船に乗って行くような他力の易行道によらなければならないといっているのに符合している。男女貴賤・行住坐臥をえらばず念仏は修しやすが、救済の道として造像起塔・智慧高才・持戒持律等を求める諸行は修しがたい。易行念仏は、もと阿弥陀仏が法蔵菩薩の昔平等の慈悲にうながされて一切を摂しようとしたことにもとづく。この平等の慈悲を基盤とする本願——とりわけ第十八願——に乗じて念仏すれば、「瓦礫をして変じて金とならしめる」とことができるというのである。

本願のかの同時条件的な構造に加えて、念仏易行の選取により、浄土教は大乗仏教の根本義に沿いつつ、それ独自の優れた救済論を展開しえたのである。

三「念」は「声」なり

第三章の冒頭では、『無量寿經』第十八願の引用にあわせて、善導大師の『観念法門』と『往生礼讃』の文が引かれている。第十八願の「乃至十念」は『観念法門』『往生礼讃』ではそれぞれ「わが名字を称すること、下十声に至るまで」「わが名号を称すること、下十声に至るまで」となっており、法然上人はこれを典拠として、「念」は「声」なりということ、すなわち念声を一を主張したのである。『一枚起請文』に「もろこしわが朝に、もろもろの智者たちのさたし申さるる観念の念にもあらず。また学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず。」とあるように、乃至十念の念は観念や憶念の念ではなく、ただ一向に唱えるという声（称）の念仏なのである。本願の中でも第十八願、その中でも念が声であることこそ、法然上人の選択本願念仏の眼目であり、仏の本願の根本義にもかなうのである。それはなぜか。本願選択の営みをされたかの法蔵菩薩が願成就し、阿弥陀仏となつて「いま現に」極楽浄土で説法したまい、われわれ

がただその名号を唱えさえすれば、仏つねにこれを聞きたまひ、必ずわれわれを救つてくださるからである。「いま現に」仏の本願力はわれわれに働きかけている。名号を唱えることはこれに相應することにほかならない。相應すればそのとき、われわれは本願に乘じて自然に救いの境涯へと運ばれる。この必得往生をあらしめるのが念声は一の念仏なのである。なお「乃至十念」は「下十声に至るまで」と積されてあるが、法然上人はさらにこれを積して、乃至とは多より少へ向かうこと、多とは上、少とは下のことであり、くわしくは「上、一形を尽くし、下、十声に至る。」ということであるとされた。すなわち、一生涯多くの念仏を唱えることから、臨終のときの十声一声の念仏にいたるまで、いずれも救いを可能ならしめるとされたのである。ところが、法然上人の弟子たちの間にこの点について疑義が生じ、一念義と多念義の論争・分派が生じたことは、周知のとおりである。

第三章においては、以上のごとく、キリスト教の救済の原構造——神の創造・人間の墮罪・イエスの死と復活・最後の審判という原構造に比しても遜色のない、浄土教の救済の原構造とその意義とが、力づくよく宣揚されているのである。



法然上人をめぐる人びと(四)

念仏人と歴史

——二人の空阿弥陀仏——

伊 藤 唯 真

(仏教大学助教授)

空阿弥陀仏トイウヒト二人イマス。ヒトリハ高野ノ
明遍、コレヲハ有智ノ空阿弥陀仏トイウ、ヒトリハ
(略)無智ノ空阿弥陀仏トナツク。徳行ハヤクアラ
ハレテ、名望世ニサカリナリ。

——名義進文集——

法然上人と同時代に世に出られた諸宗の英僧で、上人
の化導に随って、もとの宗旨を改め、さわやかに専修念
仏の門に入られた方が多かった。

法然上人の孫弟子に当る敬西房信瑞は、その著『名義

進文集』に、このような人びととして禅林寺の静遍僧
都、高野の明遍僧都、長楽寺の隆寛律師、空阿弥陀仏、
白河上人信空、出雲路上人覚愉、毗沙門堂の明禅法印の
八人を挙げ、それぞれの言行を記している。

いずれも、浄土の法門に帰伏し、永く本宗(本来の宗
旨)の執心をすてて、称名を往生の所作とされた方々で
ある。このうち、高野山の蓮華谷聖の開祖であつた明遍
と、嘉禄の法難で念仏興行の根本張本人として配流に処
せられた空阿弥陀仏とは、ともにそれぞれの念仏集団の
指導者として大きな影響力を持っていた念仏者であつ

た。

明遍は善光寺詣での途中、小松殿におられた法然上人を訪ねて法門を談じ、空阿弥陀仏も法然上人に会い、「無観称名の義」(信空・信瑞の法系で使われた言葉で、散乱の心のままで、弥陀の本願力を憑んで、ひたすら口に聖名を唱えること)を聞いてからは礼讃もせず、誦経も止めて、ただ称名をこととし、「専修ノ棟梁」と云われた。

明遍も通世後空阿弥陀仏と号したので、世人は明遍を「有智の空阿弥陀仏」と称し、右の空阿弥陀仏(勅修御伝)では法性寺の空阿弥陀仏という)を「無智の空阿弥陀仏」と名づけて区別した。有智、無智と世間から見られた差はあれ、ともに法然上人との触れ合いによって自己の宗教を深めた「無極の道心者」であった。

『勅修御伝』は第十六巻全部を「有智の空阿弥陀仏」明遍僧都の記事に充て、第四十八巻に「無智の(法性寺の)空阿弥陀仏」のことを書いている。

明遍は藤原通憲入道信西を父として、康治元年(一一四二)に生まれた。法然上人より十歳年下、前号で述べた遊蓮房円照とは兄弟である。十八歳の時父の信西入道が平治の乱で殺され、明遍は越後に流された。許されてからは東大寺にあって、敏覚を師として三論を学んだ。

敏覚の父は高階経敏で、明遍の父信西入道はこの経敏の猶子であった。浄土宗開宗の承安五年、明遍は三十四歳、権律師であった。すでに当代「能説五人」の一人に数えられていた。

師の敏覚が治承元年(一一七七)東大寺別当を失脚して、京都に移って「西方ノ行人」となつてから、明遍の前途洋々の歩みは停滞し、彼はこの頃から東大寺の別所の光明山に籠居した。治承五年(一一八一)四十歳で敏覚と死別し、京の住坊を師から譲られた明遍は都に出る機会も多く、僧階昇任の望みを捨て切れなかったようである。しかし出離の要路を求める心も深く、四十五歳の時、法然上人と顕真僧都との大原での問答に列席している。

かくて建久六年(一一九五)五十四歳で高野山に籠居し、やがて少僧都の宣下があったがこれを辞退した。山上では蓮華谷に蓮華三昧院を立て、この庵室を中心に念仏聖が集まり、蓮華谷のひじりと云われた。俊乗房重源が大仏殿再建のため高野山に常任しないため、明遍は念仏ひじりの中心人物であった。

高野山に住して三十余年、法然上人におくれること十四年の貞応三年(一二二四)六月、八十三歳で蓮華三昧

院に歿し、明遍通りの奥に葬られた。

ある年、明遍は善光寺参詣のとき、小松殿におられた法然上人を訪ね、いきなり「どうすれば生死を離れますか」と尋ねた。法然上人は「南無阿弥陀仏と申して極楽を期するにしかず」と答えられた。「念仏のとき心が散乱するのをどうすればよいでしょうか」とさらに質問したのに対し、上人は「心が散るのは源空も力の及ばないことだ」と答え、さらに、

散れどもなお称すれば、仏の願力に乗じて、往生すべしとこそ心得て候へ。ただ所詮おほらかに念仏を申すが第一の事にて候なり

と教えられると、「これ、これ。このお言葉を受け給わりに来たのです」と云って、別れの挨拶もせず退出した、という。

また明遍は、『選択集』を読んで、偏執のところがあると感じて寝た夜の夢に、法然上人が病人に粥を施すのを見て、末世のわれらは重病人と同じで、三論法相の柑子、真言天台の梨子もたべられず、念仏三昧の重湯で生死を出づべきであると悟った。

また明遍がなかなかの理論家であったことは有智の空阿弥陀仏と云われたことでも知られるが、その明遍がた

どりついた宗教は但称の念仏、還愚痴の宗教であった。

例えばある人から「念作往生は決定的か」と問われ、「なま知恵は往生のさわりとなります。私にすればむかし学んだ三論学がそれです。念仏往生では八無知のものの、み名を唱えば必ず迎え給う」と信ずるほかの賢しらの心を捨て、ほればれと念仏申しておれば往生は間違いないありません」と答えている。また「仏法では念仏の法だけ」を知り、才覚とてもへただ申すものは往生するVということだけを知って、念仏して往生しようと思っているのです」とも述べている。

明遍はひとえに法然上人の勸化を仰信し、上人の滅後には源智を尋ねて、上人自筆の『三昧発得記』を拝覧して感涙にむせび、また上人の遺骨を一期の間くびにかけていた、と伝えられている。

無智の空阿弥陀仏は延暦寺の僧であったが、叡山を辞して聚洛に出で、法然上人に出会ってからは称名の行者になったという。在所を定めず、沐浴用便のほか、衣をぬがなかった。

法然上人の入滅の前後から、貴賤の帰依を受け、その教化は京洛、四天王寺周辺の広い階層にわたっていた。彼は明遍とはちがったタイプの念仏聖であった。

建保四年（一二一六）には九条堂で四十八日の念仏を修し、翌年には二条院姫宮造立の大宮相国堂を念仏道場として、多数の信者を集めた。つねに四十八人の能声をととのえて一七日の念仏を修したと伝えられている。

法然上人の高弟法蓮房信空は、空阿弥陀仏を世間では無智の人と思っているが、権者の振舞だと深く帰伏していた。空阿弥陀仏は「多念ノ純本、専修ノ棟梁」で、「一念多念ノ座ヲ分ケテ彼此混同」しなかったという。彼は多念義の念仏者であった。藤原頼資、経光父子は嘉禄二年（一二二六）天王寺に詣で、空阿弥陀仏が多念方として如法念仏しているのを見ている。

空阿弥陀仏は念仏の助行として和讃を認めていた。念仏の時の終りごとに

娑婆ニ念仏ヲツトムレバ、浄土ニ蓮スヲ生ズナル、
一生常ニ退セネバ、コノハナカヘリテ迎フナリ、一
世ノ勤修ハ須叟ノホド、衆事ヲナゲステ願フベシ、
願ハバ必ズ生レナム、ユメユメオコタルコトナカ
レ、光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨
などの文讀を誦する法式は、この上人が創始したものだ
という。また風鈴を愛玩し、念仏道場にはいつもこれを
掛け、極楽の宝樹の風の響きを慕ったという。

空阿弥陀仏が所勞のとき、日ごろの安心を決定させるため、法然上人に尋ねられたところ、「凡夫の生死をいづる事は往生浄土にはしかず。往生の業おほしといへども称名念仏にはしかず。称名念仏はこれかの仏の本願の行なり（略）故に称名往生はこれ弥陀の本願なり、念仏のときこの觀をなすべし。本願あやまり給わず、かならず引接をたれ給へと。このほかには別の觀行いるべからず云々」との上人の御返事を得た。

法然上人はまた常に「源空は智徳をもて人を化するなを不足なり。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念仏の大先達としてあまねく化導ひろし。我もし人身をうけば大愚痴の身となり、念仏勤行の人たらむ」と仰せられ、空阿弥陀仏も上人を仏の如く崇敬し、右京権大夫隆信の子、左京大夫信実上人の真影をかかしめ、一期の間本尊と仰いだ、という。知恩院に安置する絵像の真影がこれである、と『勅修御伝』は伝えている。

嘉禄元年（一二二五）往生の噂があつたが蘇生し、同三年（一二二七）延暦寺の訴えて、隆寛律師、幸西とともに流罪に処され、彼は原秋沢の流人名で薩摩に配流となつた。そして翌安貞二年（一二二八）七十四歳で歿した。明遍がなくなつてから四年後であつた。

異僧眞覺

第十五回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)



明くる朝、動行に打つ鐘の音に警いた近所の者が恐る恐る覗きに来た。

「あのう……和尚^{わう}さんは何処から？」

「京から来た」

「へえ！ 京から……京から何でまたこんな田舎のボロ寺へ？」

「俺は一里山の深田清次良の息子だ」

「深田？ ああ、ああ！ 聞いたつた。何でも尻っ子の息子が坊さんになったと。それが和尚^{わう}さんですかいな。こりゃ有

難いこっちゃ。

一里山は隣り

村。生れ在所へ

帰ってもらたも

一緒や。こりゃああ有難い。こりゃ早うみんなに知らせんならん」

と、とび出して行つたが、やがて十人ばかり顔を揃えてやつて来た。一番年長らしい七十がらみの老人が

「俺^{わし}は伝次と申しますが」



=眞覺作六地藏=

と自己紹介してから（久しく無住で困^うじ果てていた吾々檀家も、これで安心だ。どうぞ気安く居て貰いたい。殊に隣りに所出の和尚さんであれば、吾々も気がおけなくて何より有難い）等と、くどくど挨拶してから、取り敢えず当座の食料として一軒あたり一斗ずつと、米と味噌を集めるが他に入用の物があれば遠慮なく申し出て欲しい。と素朴な喜びを伝えて引き揚げて行った。

外に出た真覚は驚いた。永く無住の寺は、さすがに堂も庭も荒れ放題で、庭もそれにつづく裏の竹藪も境いなく枯れ草を敷きつめたようで、その間から又新しい芽がふき出している。五間に四間の堂を取りまいた百坪余りの境内を、ざっと掃除するのに十日はかかるだろうと彼は思った。

（兎に角此処を一つきれいにしよからの事だ）

と、堂を開け放して庭に降りた。ざくざく草を刈り始める。と、治兵衛の家で草刈りや稲刈りを手伝った子供の頃が想い出された。治兵衛やおちまの顔が浮んだ。おちまはもう白い眼で彼を睨まなかったが、餓鬼大将の太吉の野太い声と嘲笑は、もう三十歳に近い真覚に、昔と同じように一種の威圧をもって耳朶に響いた。

（坊主のくせに尼僧の裸を見たり、撫でたりして、とうとう尼を狂わしてしまつて、それでもお前は坊主か。邪淫戒と

殺生戒と二つともお前は犯したではないか）

太吉の声はそう言つて彼を詰^きつた。真覚は（そうだ。お前の言う通りだ。もう俺は坊主ではなくなった。その資格はもう無い。只の人間だ。只の人間が衣を被っているだけの事だ）心の中でそう答えた。そう割切つてみても、やはり釈然としなかった。（ほう。これは傑作じゃ。清八よお前は天分があるかも知れんぞ）くるくる廻る南瓜のミラボールの光の中で新福寺の和尚が言つた。そうだ天分が。いや、判らぬ。これからだ。天分があるとも無いとも、兎に角努力次第だ。学問も説教も、戒律堅固の清僧も、何もかもに失格した俺だ。画か彫り物か、それより外に途の無い俺だ。

想い出と、胸の苦衷と、さまざまの想念に翻弄されつつ草を刈るのが真覚住職晋山の日の姿であつた。（和尚さんが居らんから、永い間お経もろくろく読んで貰つてないので）と云う檀家の依頼で、彼は不精々々十軒の読経に廻つただけで、万福寺の竟空院主も治兵衛の家も訪ねなかつた。殊に竟空には一度逢つて挨拶したいと思つたが、やはり疚しい思いが先にたつて、どうしてもそれが出来なかつた。

数日後大蓮寺から（妙春があの日以来行方知れずになつて案じているが、若しそちらに居るようなら、早速帰山するよう伝えて欲しい）との書面が届き、彼は仰天した。京に帰つ

たと安心し切っていた彼は、驚くと云うよりも狼狽した。と、いっても探す心当りは無い。途方に暮れながら、斯うなる原因を己が造ったのだ、と思うと何処迄も和尚に迷惑をかけ続ける自分が腹立たしくさえた。そんな気持を、意を尽せぬままに認めて和尚への詫び状としたが（貴方が観音様を彫った時には帰って来ます。きっと彫って下さい）と念を押して、あの夜、寺の石段をヒタヒタと降りて行った妙春が、三河の実家に帰ったとは彼には到底考えられなかった。

唐橋を潜り、湖南の山間から流れ出た大戸、太神、信楽の三つの流れを合せた勢多川は、喜撰、大峰の二峰に狭まれて天ヶ瀬を涼々の流れとなつて降り、やがて宇治平等院のほとりを経て宇治川となる。その天ヶ瀬の喉首に当る山間の小部落曾束の百姓作平は、彼が朝の日課としている網を、未だ明けきらぬ川面に投げていた。その網に一人の水死人が引かかった。早い流れに採まれているうちに衣類が剥がれたのであるうか、一糸も纏わぬ尼僧であつた。言うまでもなく妙春である。首を締められた痕もなければ、切られた様子も無い美しい妹である。此の部落ではさして珍しくもない水死人であるが、此の死人の美しさに驚いた作平は溜息をついた。

（尼さんじゃが……まるで生身の観音様じゃ。いや観音様でもこんな綺麗でござるかどう判らぬ。こんな綺麗な尼さ

んが……いや、あんまり美しうて身が保てなんだのかも知れぬ。可愛そうに）そう思いを廻らしつつ魅入られたようになつていた彼は（そうじゃ、人目につかぬうちに）と、死骸を網にぐるぐるつと巻き込むと、人気の無いのを見すまして家に急いだ。川つ濶から小半丁上った一本榎の蔭に独り者の作平の家はあつた。格別の変わり者でも無いが、面倒だからといふ女房も貰わず、ひっそりと暮す男の住居に相応しいたたずまいである。腰の手拭いを外して尼僧の死骸を拭き乍ら彼は少しも穢いと思わなかった。

（独り者の俺にも一日だけ嫁女がござつた。而も観音様の嫁女じゃ）

独りごちつつ彼は、年中敷きつ放しの彼の寢床に尼の死骸を寝かせ、薄い布団をかけ、じつと顔を覗いてみると、それは愈々死人とは思えない。

「ほんに観音様じゃ」と、又口の中でつぶやいた。

死人を見付けた者は村役人に届け出なければならぬと、彼は百も承知だが、死人とはいへ此の美しい尼僧が役人共の目に晒される事を想像すると、それは耐えられない気持だつた。妬いと思つた。そうさせてはならぬと思つた。（此の仏様だけは届ける訳にはいかん）処置を思いあぐねた彼は、戸

口に嚴重な締めをすると、鋤をかついで裏の山畑に上って行った。上り乍らやはり誰かに見られはしないかと気を配っていた。

藪につらなっている畑の隅は滅多に人が通らぬ、而も其処で作業する彼の姿も周囲から完全に遮蔽された場所であった。作平は穴を掘った。背の高い彼が首まですっぽり入る位に深く掘り下げた。汗をどっぴりかいてその仕事を終った時には遅い春の日も漸く暮れ、あちこちに三戸二戸と散在する家々に灯が入っていた。吾が家に戻った彼は冷たい山の取り水で汗を拭いてサツパリすると、ドブ酒を持ち出して死人の枕辺にどっかり坐った。ゆっくりと濁り酒を飲み乍ら夜の更けるのを待つ間、彼は飽くことなく尼僧の顔を見つめた。見詰めながらおし殺した声で話しかけた。

「若しあんたを木っ葉役人に預けたら、あいつ等は貴女^{あなた}さんの身元もあれこれと詮索しますでな……俺が葬ってあげます。その方が貴女さんよろしかる。そして俺もうれしいし。もう五十を過ぎていながら女の味を知らぬ俺は今晩貴女さんを抱かせて貰います。一生に一度のこつてす。嫁さんのつもりで抱かせて貰いますでな」

彼は薄い布団を二枚押込みから引き出すとフツと灯を消した。灯の消えた静かな暗がりの中で、附近に人の気配の無い

事を確かめると、その布団をヒョイと左の肩に引つ掛け、ぐったりと扱いにくくなった死人のうなじに右手をなめらかな丸い腰の下に左手をさし入れて抱き上げた。頬が触れ合った。裏口から抜けるように出た彼は、そのままの姿勢で星明りの夜の山道をたどった。心地よく己の肩から胸におしかかる圧力と死人の冷たい躰は一步一步ゆれて腹に伝えて来る重さは作平の全身とこの世のものとも思えぬ楽しさで満した。何時までもそうしていたいと思った。

藪蔭の辿りついた彼は穴の底に丁寧な布団を敷いた。そこに静かに冷たい躰を横たえ家で寝かせていた時のように上に一枚そっとかけた。

「さあ、もうお別れですのう」

ともう一度覗き込んだ時、心なしか死人の口許にかすかな微笑が沸いた。

「悦んでござるのう。よかったよかった。成仏しなされや。」念仏し乍ら土をかけた。土を掛け終ると、足音をしのばせて裏戸を潜った。濁酒の壺を傾け乍ら「葬式と通夜がさかさになったが、今夜は俺が通夜をしてあげますでな」と心の中はせつなかった。

気疲れの加わった酔いが急速に廻ると、作平はついさっき迄死人を寝かせていた寢床にさっさとめぐり込んだ。



西光寺への道

高橋良和

この間、京都市右京区太秦の西光寺の住田成心御法尼から、同寺経営の太秦保育園の園舎が新築した披露のしらせをうけた。久しぶりに太秦のこの寺を訪ねてお祝いを申しあげようということで、太秦の広隆寺のあたりで車をおりて、住宅の立ちならぶ道をいくと、西光寺の門の前に出た。

このあたりを太秦多藪町というが、昔は竹藪が多かったのだ、それが地名になったのである。

藪などは探がしてもみあたらず、空地などがなく、全く市中と同じであ

る。太秦は推古天皇の十一年に聖徳太子が創建した蜂岡広隆寺を中心として発展したところであるが、太秦というのは、当時百濟からきた帰化人が、宮中に絹を献上するについて、それをうず高く積み重ねたので太秦寺と称したという土地である。

そうであるから、桓武天皇が平安京を造営されるについて、秦の川勝が自分の邸宅を提供して大極殿を建てたといわれるくらいで、その豪壮な邸宅を偲ぶのは、今日の京都の中央から西は川勝の土地であったといえる。

西光寺は太秦広隆寺の一つの塔頭であったと思われる。その房主というのが、住職というか円空という人であって、来迎房円空と称していたようである。

それは法然上人の滅後十六年すぎたときであった。

京都東山の大谷の禪房の東の崖のたいらな地に、法然上人の遺骸を埋葬したのであったが、法然上人に対する比叡山からの迫害は、十数年すぎたこの時までつづいていたのである。

念仏僧を衣を破れ、法然の書物を焼き

捨ててしまえ、このふれは京都市内にはり出され、その上群盗、夜盗もこれに力を貸したのであるから、念仏聖といわれる僧たちは、京都の町を歩くことが出来なかつたので、秘かに嵯峨野、六波羅、吉祥院などに隠れて、念仏のつどいを開いていたらしい。

そして嘉禄三年（一二七）になつたとき、その年の六月二十二日に亡き法然上人の遺骸を掘り出そうという動きが、比叡山の僧兵の間で起つたのである。

それは六月二十二日のことであつた。比叡山の暴徒は、京都に下山して、この法然上人の遺骸を鴨川に流すことを決めたのであるから、日本の祖師のなかで、死後まで迫害をうけたのは、法然上人だけであるといえる。

このことを聞きつけた法然上人の門弟たちは、法蓮房信空と相談の結果、このまま大谷の禪房の地に埋めておくことは、もし祖師の遺骸に鞭をあてるような

ことになれば申しわけがないということ、そつと墓から掘り起こして他のところへ移そうと決意したのである。

やがてこよひ人しづまりてのち、ひそかに御棺の石の櫃のふたをひらくに、面像いけるがごとくして、異香芬馥（ふんいく）せり、貴しなどいへばさけらなり。をのをの随喜の涙をぞなかしける。

と四十八巻伝に記している。

それでこの遺骸を掘り出して、洛西嵯峨の二尊院に移すことになり、宇都宮弥左郎が警護して、この二尊院に運こんだところ、この寺でもなお危険を感じたらしく、つづいて太秦の来迎房のもとに移すことになつたので、嘉禄三年六月二十八日にそつとこの西光寺に安置したといわれている。

このとき一千人の嵯峨門徒がしずしずと、上人の遺骸のあとにつづき、しずかな念仏の声は小倉山のあたりから、その

太秦に流れたという。そしてこの西光寺には、翌年の安貞二年正月二十五日まで約七カ月間、隠されたのである。

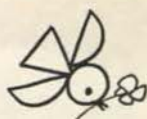
この正月二十五日に、なお危険を感じたので、ついに西山栗生野の光明寺の幸阿弥陀仏のもとに移して、荼毘することになった。

西光寺は、東山大谷の禪房につづいて、法然上人の遺骸を安置した時日は長く、靈蹟としての縁りは一入である。

本堂の右の方に石柱がある。これは法然上人の遺骸を納めた塔婆である。

そして本尊さまは、止利仏師の作といわれている。これは法然上人の念持仏であつたのを、来迎房円空が上人の入滅はこれをいただいてまつたといわれの仏さまである。その銘も円空と刻んである。

新しい保育園の園舎が出来たけれど、それは裏の方で、本堂も、庫裡もそのままで、山門がことのほか古さびていて、昔の物語りを秘めているようである。



浄土宗の国宝 (3)

芝増上寺三門

急激なる東京の変身は往昔の面影を忽ちのうちに壊し、隅に追いやられ昔のよすがを偲ぶことさえむずかしくなった。

“時代の流れ”これも仕方のないことかもしれないが、なか人の心までも壊している感が強い。とりかえすことのできない“歴史を”“人の心を”……。

ここに紹介する芝増上寺の三門は先に紹介した知恩院三門と同時期の代表作である。

増上寺は西譽聖聡の草創で、天正十八年(一五九〇)徳川家康が江戸入城に際して増上寺を徳川家の菩提寺と定め、それまで武蔵国豊島郡貝塚にあったものを慶長三年(一五九七)八月現在の地に移転したもの。当時の住職、中興十二世普光観智国師存応は家康の帰依あって、多大の寺領と保護を賜わり当代一の名利となった。

この三門は家康により慶長十年に建立されたもので間口十

間四尺五寸・奥行五間、朱塗の重層入母屋造りで上層が下層より大きくどっしりとした重量感のある三門である。左右には耳廊が続き均衡と安定感を添えている。楼上下部には中央に釈迦三尊仏、左右に十六羅漢が、それぞれ安置されている。これら尊像は異国のもので初め長門国泰然寺にあったものを秀忠の命によって移転したもの。寛永元年に法眼徳悦、貞享二年には仏師源慶によって彩色の修復が施されている。三門そのものは寛永元年改造、天禄九年修復、さらに明治四十四年大修繕、近くは昭和十一年に修復が加えられたが元型は失なわれていない。大正四年(一九一五)三月特別保護建造物に指定された。

戦前までは芝公園の鬱蒼とした樹木の緑に映える朱塗の三門は江戸情緒をいやおうなく味わうことができたであろう。文人・画人等をして喜ばせたとも聞く。現在では経蔵(国宝)とならんで増上寺の威容を誇る代表的建築である。今は高層ビルに囲まれ、車の排気ガスをあびながら時代にとり残されたように淋しげな様相を目にうえつけられる。近代科学のもとに自然破壊、貴重な歴史破壊と多く目にし耳にする。風雪に耐え世の移り変りをじっとみてきたこの三門は、一体、現代の社会をどのようにみつめていることであろうか……。

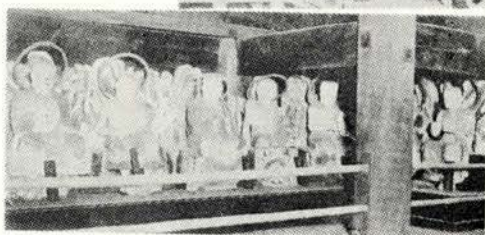
(佐々木洋之)



増上寺山門



一 釈迦三尊像



一十六羅漢

〈楼上内部〉

「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土

四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十八年三月二十五日 印刷

昭和四十八年四月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

大正大学助教授 宮 林 昭 彦 著

B6判 96頁 定価 160円 (200部以上 140円)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

1. 法然上人の時代と出家
2. 求道生活
3. 専修念仏の確信
4. 新しい救済
5. 晩年の法然上人

第二編 浄土宗のおしえ

1. 浄土宗を開かれたわけ
2. 末法と人間
3. 万人平等の救い
4. 選択のおしえ
5. 浄土三部経
6. 阿弥陀仏と浄土
7. 浄土宗の真髄

第三編 信徒の心得

1. 浄土宗の年中行事
2. 仏事の手びき

法然上人略年譜・附参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。お申込みはお早目をお願いいたします。